

[論文]

朝河貫一と第1次世界大戦

パリ滞在期を中心に

増井由紀美*

Asakawa Kan'ichi and World War I

— August in Paris, 1915 —

Yukimi MASUI

Asakawa Kan'ichi (1873–1948) lived in the United States most of his lifetime, first as a student and later as a scholar of history. He left Yokohama in the winter of 1895 and died in a summer resort of New England in 1948. His purpose in studying abroad was to become a man who would serve both his own country and the world.

Being faithful to own words, his early work, “The Russo-Japan Conflict” (1904), was well received by intellectuals of the time, and numerous lectures on the Far East to American audiences followed. That was when Japan started to become involved in the “century of war and peace.” Some 30 years later, Asakawa again tried to take a great responsibility as a trained scholar. He wrote the draft of a letter from President F. D. Roosevelt to Emperor Hirohito aimed at avoiding war

*ますい・ゆきみ：敬愛大学国際学部准教授 アメリカ研究

Associate Professor of American Studies, Faculty of International Studies, Keiai University.

between Japan and the United States in 1941. History shows that it was not successful; the Emperor received the letter around the time that the first attack on Pearl Harbor was about to start.

Asakawa was indeed a man of service, and the “Asakawa Papers,” which have been kept at Yale University, reveal that this was so during World War I as well. He in fact wrote many letters to the prime minister of Japan, Okuma Shigenobu, asking him to be sensitive to world criticism of Japanese policy toward China. His scholarly interest, however, was not limited to Asian issues. Asakawa decided to see Europe in wartime, for he knew that was when you would see particular behavior of the people. He visited Italy, France, and England for three months in the summer of 1915. In this paper I focus on his stay in Paris. Using Asakawa’s diaries as a primary source, I would like to reveal how he interpreted the war and people in France.

Moreover, I present an interview given to Eugene Tardieu of *L’Écho de Paris* in the form of a translation, which I believe appears here for the first time since its publication. It is interesting to note that Asakawa was interviewed as an *étranger* in America. Tardieu’s purpose was to show how Americans would think about the war in Europe through a third person. Answering his questions, Asakawa was beginning to reconstruct his own view of American nationality.

はじめに

朝河貫一（1873－1948）は、1895年12月に留学生として渡米して以来、人生の大半をコネチカット州ニューヘイブンで過ごした。伝記著者の阿部善雄（1920－1986）は、朝河の生涯を一冊の本にまとめた時、そのタイトルを『最後の「日本人」』^①とし、かぎ括弧付の「日本人」の解釈をめぐることは、これを「侍」あるいは「武士」と読む研究者もいる^②。ただ、西洋の学問や芸術を吸収しながら、日本特有の伝統を守り育てようとしていた明治期に、その時代を代表する文学者坪内逍遙（1859－1935）や哲学者大西祝（1864－1900）に薫陶を受けた青年は、自国を世界地図の中に置いて捉える術を身に付けた「国際人」として生きることを選ぶのである。朝河

は「最後の侍/武士」であると同時に、近代化の中で柔軟な思想を身に付けていった「最初の国際人」でもあった。

20世紀の前半、日本は日露戦争、第1次世界大戦、第2次世界大戦、と国際紛争の当事者となる道を選択した。朝河貫一は、先進国の多くが係わったこれらの大戦をアメリカで体験し、学者としての自覚に基づいた働きを成すこととなる。つまり、それぞれの時代に於いて、在米日本人として、また研究者としての役割を果たそうと行動を起こすのである。日露戦争時は、東アジア研究の専門家として、講演に奔走した⁽³⁾。第2次世界大戦時は、太平洋戦争回避のため、ハーバード大学フォッグ美術館館長のラングドン・ウォナー（Langdon Warner, 1881-1955）と協力し、アメリカ大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルト（Franklin Delano Roosevelt, 1882-1945）から天皇陛下（裕仁、1901 - 1989）への親書作りに精魂を注いだ⁽⁴⁾。そして、本稿で扱う第1次世界大戦時は、時の首相大隈重信（1838 - 1922）に対し、書面にて日本の対中国政策への批判を続けたのである。

朝河の主張は常に一貫していた。国際社会の中で日本は尊厳ある立場を維持し続けるべきであるという信念に基づいてのことであった。世界に向かっては、日本への誤解を解こうと努め、日本に向かっては、異国にいるからこそ見えるものもあるという謙虚な姿勢で、提言し続けた。

朝河が時事を語る時、歴史的な側面を無視することはない。そして、その国を知る為には実際にその地を踏み人々を観察するという方法論を、フィールド調査が社会学、人類学、経済学の中に重要な位置を占めるようになっていた20世紀の初め、知の先端を担うイエール大学という環境で、既に身に付けていた。

第1次世界大戦の最中、朝河はイタリア、フランス、イギリスを巡る旅に出るが、その目的は、戦争という特異な環境の中に置かれた人々の暮らしぶりを現地にて観察することであった。1915年6月5日にニューヨークを発ち、17日にナポリに入る。友人ダイアナ・ワッツ（Diana Watts）のナポリの別荘を拠点におよそ2ヵ月をイタリアで過ごした後、8月13日にパリに移動する。パリ滞在は3週間ほどで、その後は9月21日にアメリカ行

きの船に乗るまで、ロンドンに滞在する⁽⁵⁾。

本稿では、このヨーロッパ旅行の中で、特に、パリ滞在の3週間に焦点を当てる。朝河の欧州旅行に関しての研究は殆どない。『最後の「日本人」』においても、「学術調査のため、伊仏英三国に出張」、また「ナポリ・カプリ・ローマ・ミラノ・パリ・ロンドンと巡遊」と、事実関係のみが列挙されているにすぎない⁽⁶⁾。私は5年程前、朝河研究会に於いて朝河の英文日記を翻訳しながら、この時期のイタリア滞在に焦点を当てて報告したことがある⁽⁷⁾。しかし、パリの滞在期間に関しては殆ど触れなかった。日記に残された「パリでのインタビュー」⁽⁸⁾を調査してからと考えていたからである。昨年（2007年）夏、パリのフランス国立図書館（Bibliothèque National de France）にて、マイクロフィルムでこの新聞記事を確認した。本稿では、それも資料に加えながら、朝河が第1次世界大戦時の東アジア、アメリカ、ヨーロッパ事情をどのように捉えていたか、その分析を試みる。

加えて、もうひとつ参考にしたい文献がある。それは島崎藤村（1872－1943）の「戦争とパリ」⁽⁹⁾である。1913年から1916年までのフランス滞在時に『東京朝日新聞』に連載されたフランス便りの後半部分であるが、朝河訪欧と一部時期が重なる。藤村の文章は新聞読者を意識して書かれたものであり、描写が具体的であることから、当時のパリの状況及びそこに住む日本人の生活を知る資料として用いることにした。本研究もこれまでと同様、朝河貫一の人物研究の一端であり、イェール大学に保管されている日記の一部（1914－1915）を第1次資料としつつ、そこから表れる人物像、及びその思想の提示を主眼とする。

第1章においては、朝河が第1次世界大戦をどのように捉えていたかを、渡欧前の日記に残された記述に基づき検証し、何故敢えて戦時下を選んで旅行を執行したかを同資料に探る。また同時に資料に表れる時代性にも言及するつもりである。次に、戦時下のパリにおける朝河の行動に焦点を置き、これまで言及されることのなかった朝河のパリ滞在について、また当時の人間関係について明らかにする。そして最後に、新資料の提示となるが、朝河がパリ滞在時に受けたインタビュー記事「アメリカと戦争

(L'Amérique et la Guerre)」の翻訳を試み、第三国に赴くことにより新たに整理された朝河のアメリカ観を紹介したい。

I. 欧州旅行に臨んで

アメリカの世論：日本は間違っている

ヨーロッパが戦争に突入した1914年の夏、朝河はいつものように、ダートマス時代の友人、ジョージ・クラーク (George Clark) の別荘で過ごしていた。戦争関連のニュースはボストンやニューヨーク発行の新聞を通し、定期的に入ってきた。また、日本から送られてくる刊行物や手紙で日本の東アジア政策に関する状況を把握した。日露戦争時と同様、在外知識人としての責任感が朝河に筆をとらせる。

日露戦争終結から4年経った1909年6月、朝河は『日本の禍機』⁽¹⁰⁾ を実業之日本社より出版する。時事的な執筆は自らの目指すところではないと断わりながら、これを著したのは日本の東アジア政策に対する海外からの批判に耳を傾けさせるためであった。外交の侵略的要素に敏感に反応していた時代、日本の方向性は批判的となっていった。朝河はこの点を強調したわけだ。しかし、その警告も空しく、さらに5年後、ヨーロッパが戦争に突入すると、日本の侵略的東アジア政策に拍車がかけられていく。朝河は、母国が世界から孤立するのを避けなければと、時の首相大隈重信に書面にて訴えるのである。

『朝河貫一書簡集』⁽¹¹⁾ には、第1次世界大戦中の大隈宛手紙(控)が5通収められており、朝河の主張に関しては、本書簡集の編集委員であり朝河貫一研究会元会長中村尚美によって「朝河貫一のアジア政策批判」⁽¹²⁾ の中で詳しく紹介されている。中村の分析の通り、朝河は日本による膠州湾の占領や中国への二十一箇条要求がいかに侵略主義的であるかを論じているのであるが、それを踏まえつつ、ここでは朝河がアメリカの世論を強調している点に注目したい。当時、友人へ書いた手紙にも「アメリカの世論を知

ってもらうために大隈に手紙を書くつもりである」⁽¹³⁾との一文が見られる。

朝河にとって大隈は尊敬する師であり、大隈にとって朝河は優秀な弟子であった。大隈が政治の中枢に入ると、朝河は必要に応じて大隈に意見した。大隈は、それに耳を傾け、主宰誌『新日本』に掲載することもあった⁽¹⁴⁾。弟子もまた師の著作を書評という形で海外へ紹介している⁽¹⁵⁾。朝河は大隈に認められているという自信があった。お互いに作り上げてきた信頼関係があるからこそ、朝河は、自らの提言がアメリカでの学究生活という実体験を踏まえての理性的な観察によるものであると理解されることを願った。

朝河は、アメリカの世論の影響力が単にアメリカ一国にとどまるものではないことを知っていた。日露戦争時に、東アジア関係の専門家として聴衆に語りかけながら、世論の力に支持されていることに気付いていた。この体験を持つ朝河は1914年8月22日の大隈宛書簡でアメリカ人を次のように表す。「御熟知の如く米人ハ概して国際的知識及び趣味乏しき短処あり候へども、平和正義を好む長所あり候」⁽¹⁶⁾と。朝河はアメリカの世論がヨーロッパに始まった戦争に対して、オーストリア及びドイツを「不義」と断じ、イギリス及びフランスを「正当」とみなしている点をあげながら、膠州湾租借地の譲渡に関する日本政府によるドイツ政府への通告に関しては、ドイツの方が同情を受ける側にある点を指摘する。アメリカの世論が国家を責めるのではなく、政策に見られる「不義」を糾弾するところに注目した。そうして、「米国民一般の態度ハ再び申合せたる如く一般に独逸ニ対して幾分の同情を感じるニ至り、又一般ニ日本ニ対して不快の情を抱くに至り候」⁽¹⁷⁾と進言するわけだが、「米国民一般の態度」及び「申合せたる如く」という表現に見られる通り、国民感情が即世論の形をとる民主国家の特徴を伝えているのである。日本政府の政策が、混乱につけこんだ占領行為としか見えていない現実を大隈の前に提示したわけだ。2,800字からなる大隈宛の手紙の中心には、「日本が膠州を支那へ返還するという約束は遵守されるべきであり、これが日本自らを守ることになる」⁽¹⁸⁾という主張が述べられているが、世論に耳を傾ければ自明の理であることを示し

たかったのである。

朝河が捉えた世界正義：ドイツは間違っている

ヨーロッパ戦争が長引いてくるとアメリカにも陰鬱な空気がたちこめるようになった。朝河は、日本の対東アジア政策を憂慮しながら、多くのアメリカ人と同様、ヨーロッパ戦の動向も気になっていた。

新聞は毎日戦況を伝えたが、最初の頃は報道には限界があるように思われた。国民の意見も十分な情報に基づいているようには見えなかった。そういった中で朝河は、世界のバランスを保つためには、連合軍が勝利すべきであると考えていた。8月27日の日記（友人への手紙の控）には、それによりもたらされるものとして、(1)莫大な軍事費及び人的資源の浪費からの解放、(2)労働者階級の地位の上昇及び経済力の分散、(3)人種や文化の違いを越えた平等、の3点をあげている。特に(3)に関しては、スラブ民族がドイツの圧制から自由になり、真の平等がやってくれば、スラブ文化の世界への貢献が期待できると付け加える。朝河は、民族を越え世界的な規模で貢献している偉人として「哲学ではニーチェ、文学ではトルストイ、音楽ではチャイコフスキー」と三者を並べているが、ここに知性と感性に響く真理への希求が「正義」へとつながる理であるとする、その思想が読み取れる。

大隈に説明を試みたアメリカの世論と、友人への手紙に言及した世界正義は、歩調を合わせていた。そして、これが朝河の国際感覚であった。朝河は第1次世界大戦に言及する時、日露戦争をよく引き合いに出す。朝河が認める戦争の大義は民族及び国家間の力の不均衡の是正であった。日露戦争における日本の役割は、支配する側とされる側を対等の関係へと進化させるための土台作りをした点で歴史上正当性を持つと朝河は考えた。つまり、同様に、ヨーロッパで弱者であるスラブ民族を、ヨーロッパ列強に支配されてきたアジア諸国（インドやペルシアを含む）の側に置くと、1914年に勃発したヨーロッパ戦ではドイツに非があるということになる。朝河は、歴史を踏まえることの重要性を説く。世界の一員となるためには、こ

の「正義」を通す必要があるというのが朝河の主張である。

何故、今欧州旅行か

ヨーロッパで戦争が始まると、ドイツやフランスに滞在していた日本人の中には帰国の途につくものもいれば、イギリスやアメリカへと移動するものもいた。1913年8月から1915年の8月まで『東京朝日新聞』にフランス便りを送り続けた島崎藤村の記述によれば、パリ在住の日本人も、フランス国内の地方都市や田舎に疎開したり、イギリスへ渡ったり、帰国を早めたりと、予定を変更せざるを得ない事態に陥ったことが窺える。これは大西洋の反対側の朝河の耳にも入ってきた。例えば、1914年10月、早稲田大学総長高田早苗が、欧米視察旅行の途中ニューヘイブンに朝河を訪ねるが、この時、高田はスイスでの戦争体験を語った。ロンドンで演劇修行をしていた坪内土行からも帰国の知らせが入り、そのフィアンセも、土行から資金援助を受けてアメリカに帰ってきていた⁽¹⁹⁾。ニューヘイブンに立ち寄る戦争難民から、現地話を聞くこともあった。しかし、朝河は敢えてこの時期を選んで、渡欧を決める。その理由は何であったのか。ひとつに、生涯の親友となるダイアナ・ワッツからカプリの別荘への招待を受けたという点があげられるが、最大の理由は、戦争状態だからこそ見えるものがあるとの確信に基づいた調査旅行であったのである。アメリカに於いてアメリカ人を観察するように、ヨーロッパに於いて、イタリア人やフランス人やイギリス人を観察したいと思った。

朝河は坪内逍遙へ「戦争を背景として見候へば、他の時には見えざるべき事柄多く見え候様思はれ候。私は固より経済政治等のことを調査せん為に旅行致居るにあらず、実際に伊、仏、英の三国民に触れて如何なる特色ありや、又其の文化及歴史的訓練が如何に人民日常の生活及び思想、風俗等に現はれ居るやを少しでも直接に観ん為に有之、殊に戦争が右の諸点の上に如何に影響を及ぼしつつありや、戦争が如何に此諸点を表現せしめ候やなどを観察致度存じて参り候」⁽²⁰⁾と書き送っている。ここに、朝河が文化及び歴史を作りあげてきた人々の「生活」「思想」「風俗」に関心があっ

たことが窺える。旅の目的は、戦時下という特別な状況に置かれた人々に何が見えてくるのか、それを観察することであった。

1914年及び1915年に朝河が発表した論文は、日本の封建制度に関するものであったが、大学での講義は「日本の制度史」以外に、日本及び東アジアの歴史関連の科目を担当していた。当時の要覧を繙くと、例えば「日本の美術、思想、習慣の歴史」と題する科目があり、その内容は「宗教、哲学、文学、美術、習慣、行儀作法、それらの相互関係、思潮、人々の生活の様子等の分析」となっている⁽²¹⁾。朝河は、この教授法を自らのヨーロッパ観察にも用いたのであった。

不安と期待

この時期の旅行に関しては、戦火を潜ることへの不安はあった。旅立つひと月前の5月7日には、アメリカ人を震撼させたルシタニア号撃沈事件が起こった。戦況はドイツ優勢にも見え、同日、朝河はダイアナに「ドイツ軍は連合軍を打ち負かすために、東へ西へと全力で戦っている。これに比べるとフランスやロシアの抗力は弱く歯痒い」と書く。悲惨な事件に対して憤りを感じながら筆をとったと思われるが、この戦争は連合国側に「正義」があると考えていた歴史家である。やはり戦況は連合国側に有利にすすむであろうと読んでいた。同書面には、英国の軍勢力及び、カナダ、オーストラリア、そしてニュージーランドの兵力に支えられ、連合軍に勝利がもたらされ、将来的に英仏の絆が深まるであろうという予測も為されている。

ルシタニア号の惨事では100名以上のアメリカ人の命が犠牲になった。市民によるドイツ批判は一気に高まりを見せるわけだが、朝河は個々に芽生えた同情心が束となり力となるアメリカ社会を評価する。ハノーバーのタッカー夫人へは、「今回の事件に対するアメリカ人の態度に非常に啓発されました。渡米以来、アメリカ人をこのような深い敬意をもって見たことはありません」⁽²²⁾と伝え、ウィルソン大統領がドイツ政府に対して送った公式書簡が示す平和的姿勢への評価へと続ける。「ウィルソン大統領か

ら出されたメモの明瞭さ及び鋭い論理性に好感を覚えます。天性の道德心、及び学者として受けた訓練の為せる業であるかと察します。外国人である私でさえ、誇りに思うほどです。これにドイツ側がどのように応じてくるか、期待に胸が踊ります」⁽²³⁾と感情が読みとれる文面になっている。

ヨーロッパの旅先での日記や手紙には、生命の危険に見舞われるかもしれないという不安が吐露されているが、この時期に書かれたものには見られない。着々と進められる準備に、旅の前の高揚感さえ伝わってくる。朝河は5月13日には領事館及び旅行代理店に手紙を書いている。そして翌週末は旅支度の最終段階である。同月21日の金曜日、雨の中、10時39分ニューヘイブン発の列車でニューヨークに向かう。滞在するのは常宿の「アテネ・ホテル」である。まずは、イタリア領事館及びフランス領事館に出向きビザを取得し、次に、旅行会社で船の予約をする。乗船するのはイタリア船“Duca degli Abruzzi”号である。翌日は、タケダ商会に赴き草履と足袋を購入している。また、ビザの申請のためにイギリス領事館、ギリシャ領事館、スイス領事館にも足を運ぶ。しかし、こちらは必要ないということであった。それが済むと、身支度である。当時世界で最も大きなデパートとして知られていた「ワナメーカーズ」⁽²⁴⁾でアルパカのズボン、コート、帽子を購入する。カブリで世話になるダイアナへの土産には、東洋趣味の商品で有名な「ヴァンタインズ」⁽²⁵⁾で着物を2着買い求めている。

さて、言葉の方はどうなっていたのであろうか。朝河はある時期、朝食前にラテン語及び中国語の勉強を習慣としていた。日曜日を除く週6日、ラテン語に30分、中国語に1時間をとっていたことが日記に書き込まれた1週間のスケジュール表から窺える。中世史の研究には欠かせない言語であるが、この他にもドイツ語、フランス語、の素養があったことも残された資料が物語る⁽²⁶⁾。また『朝河文書』には朝河が書いた手紙や書評が残されていることから、この2言語に関してはある程度のレベルにまで到達していたと思われる。イタリア語に関しては、ヨーロッパ滞在中の日記に記された固有名詞や日常会話的なフレーズ以上に朝河のイタリア語運用能力を証明する資料は、まだ確認されていない。但し、旅の前に、またイタ

リア滞在時に、朝河がイタリア語を勉強していたという事実は、日記に記録されている。

旅が近づくにつれ朝河の日記には、「戦争の記事を読む」という一文と同様に、「イタリア語 (Italian)」という文字が頻出する。またさらに日付を遡っていくと、1914年1月16日に「*Italian Self-Taught* を10セントで購入」という記述がある。この日は、オペラハウスで演じられるフォーブス・ロバートソン (Forbes-Robertson) の『ハムレット』⁽²⁷⁾ を観るために、ニューヨークに出かけていた。舞台が始まるまでの時間、お気に入りの本屋「ギンベル」に立ち寄り、イタリア語個人学習用のテキストを求めたというわけだ。さらに、学校にも通うつもりだったのか、その足でイタリア語学校に赴き説明を受けている。イタリアへと出発する1年以上も前の話であるが、この時、イタリア語修得の必要性はすでに自覚するところとなっていたことが窺える。

Ⅱ．戦時下のパリ

6月5日、ニューヨークの34丁目埠頭から出航したイタリア船は、17日午前5時、雨のナポリに到着する。朝河は、およそ1ヵ月をカプリ島のダイアナ・ワッツの別荘で過ごし、その後2週間をかけ、ローマ、フィレンツェ、ミラノの名所旧跡を巡る。パリに到着したのは8月13日の早朝で、9月2日にロンドンに向かうまでの3週間、戦時下のパリを観察することになる。

朝河の日記は、彼の行動を正確に伝える第1次資料ではあるが、その記録は、日々の出来事、読書中の本の書名、目下の研究テーマ、授業の準備、手紙の下書き或は写し、が中心を占めるため、それを読みながら街の風景や状況を想い描くのには限界がある。ただ、この時代、パリは多くの外国人文学者や画家、政治家が訪れる世界的な都市となっていた。彼らは、訪問の記録を新聞記事として、また作品として残しているので、時代のムードを捉えるための資料は豊富だ。

本章に於いては、島崎藤村の「戦争とパリ」を参考資料に用いる。理由は前述した通りであるが、これが訓練された作家の目により切り取られたパリの一風景であり、時代のムードを、リアリティーを持って伝えているという点に注目したい。朝河の日記と藤村の「戦争とパリ」の重なる部分に焦点を当てながら、朝河のパリ滞在がどのようなものであったかを整理したい。まずは、藤村と朝河の比較から始めよう。

朝河と藤村の共通点⁽²⁸⁾

島崎藤村は1872年2月生まれで、朝河は1873年12月生まれであるから、二人は同世代である。時代は欧化政策の真只中であり、どちらも少年期から英語に触れる。朝河の英語力は、母校安積中学（現安積高等学校）に「朝河桜」の神話⁽²⁹⁾を生み出した程だから余程優れていたと考えられよう。安積中学では、イギリス人教師ハリファックス⁽³⁰⁾に英語を習い、卒業生代表の挨拶は英語であったという。また、東京専門学校（現早稲田大学）入学前に『ベニスの賊』（M. C. Lewis）を訳し終えている⁽³¹⁾ことから、その力が立証されよう。一方藤村は、13歳から英語の勉強を始め、三田英学校（現錦城高等学校）、共立学校（現開成中学校・高等学校）そして明治学院、と英語が学習できる環境を選んでいく。また朝河が早稲田時代、翻訳や雑誌編集の助手として収入を得ていたように、藤村も20歳の頃『女学雑誌』⁽³²⁾を主宰する巖本善治（1863－1942）に依頼され、翻訳の仕事に携わるようになる。キリスト教との出会いに関しては朝河の場合は本郷教会の横井時雄に導かれ入信するが、藤村の場合は高輪台町教会（現高輪教会）の木村熊二（1845－1927）から洗礼を受けている。横井も木村も明治期にアメリカに留学し、前者はイエール大学で、後者はラトガース大学で学位を修めた神学者である。横井時雄は、後に同志社大学の学長になり、また衆議院議員を務めたことから窺えるように、中央からの改革者たろうとしたキリスト教徒であったが、木村は小諸義塾に留まり青少年の教育のために人生の大半を捧げた地方からの改革者であった。

朝河は人生の殆どをアメリカの地で過ごすことになったが、豊かな知的

訓練のはじまりは東京専門学校にあった。哲学者大西祝は朝河にアメリカの大学で通用する思考法を教示しただけでなく、ドイツ留学用の資金を先に朝河に使わせるという程弟子の才能をかっていた。また、ジャーナリストの徳富蘇峰（1863 - 1957）は、留学していく青年に、アメリカ便り執筆の仕事を与え、朝河の初期アメリカ体験は『国民新聞』⁽³³⁾に掲載されることになる。二人とも朝河の留学には欠かせない存在であったが、藤村も双方から薫陶を受ける機会を得ていた。大西の講義は明治学院時代、キリスト教夏期学校で聞いた。藤村が小諸で教員をしていた頃は、木村の招きで、横井時雄や徳富蘇峰らが講演に訪れていた。例えば、1897年8月、小諸で開かれたキリスト者夏期大会の講師の名前に横井と木村があがっている。前者は「廿世紀に於ける日本の位置」、また後者は「教育につき一言」と題して講演した。徳富蘇峰に関しても11月19日義塾で講演したという記録が残っている⁽³⁴⁾。また、藤村も朝河と同様、『国民新聞』の執筆者であった。

二人は、人生の陰の部分にも共通点がある。どちらも妻に先立たれているのである。藤村は28歳で冬子と結婚するが、彼女は4女を出産した直後に他界する。藤村39歳の夏であった。朝河は31歳でアメリカ人ミリアムと結婚。朝河39歳の冬、妻は手術後病院で亡くなる。藤村は72歳、朝河は74歳でこの世を去るが、前者は脳溢血のまま昏睡状態から戻ることなく翌日に他界、後者は心臓発作により就寝中、死を迎えた。

「忍耐」する都、パリ⁽³⁵⁾

藤村は1913年5月20日、マルセイユ港からフランスに入る。パリへは鉄道を使いリヨン経由で3日後に到着した。妻の死から3年が過ぎようとしていた42歳の時であった。一方朝河はナポリからモデナを経てパリに入っている。1915年8月13日のことで、妻の死から2年半が過ぎ、42歳の誕生日を迎える年であった。

朝河がパリに到着した時は、第1次世界大戦の最中ではあったが、パリの街は落ち着きを取り戻していた。一方、藤村は戦争勃発時のパリを観察

している。1914年8月3日、ドイツがフランスに対して宣戦布告した日、藤村は日本の読者へいつもの便りを書く。それによるとドイツとの交通が途絶えたのは8月1日で、翌日にはパリに戒厳令が布かれたという。国外からの為替の支払いが止まり、市民は食料品の調達に忙しかった。乗合自動車も消え、電車も止まり、在留の日本人も万が一の時に備えることにした。朝河がニューヘイブンに於いてイエール大学にやってくる日本人の世話役を担っていたのと同様、藤村も「村長さん」と呼ばれるようになっていた。その報告によると、日本人はいくつかのグループに分かれていたことが窺える。戦争が始まると、パリ在住日本人の数名が大使館に集まり、週に2度会議を開く。そして、京都大学からの河田嗣郎や大使館員の杉村陽之助（朝河の日記にも登場）等と共に、起こりうる状況を想定しながら案を出し合った。パリ在住120 - 130名の日本人のうち、藤村の「村」には21名の日本人がいた。それぞれの住処はパリの天文台及びモンパルナス周辺で、画家や彫刻家、そして科学者たちであった。その多くが、イギリス、アメリカ、ニース、リヨンなどへ向かい、藤村自身も8月末にはパリから列車で7時間ほどかかるリモージュに疎開し、11月中頃に戻ってくるまでの間フランスの田舎生活を体験する。藤村がパリを離れていたのは、首都がボルドーに移っていた期間（1914年9月から12月）とほぼ同じ時期であった。

さて、パリに戻った藤村は人通りの少ない冬空の下を歩きながら、「恐怖」の過ぎ去った「都」の姿を捉える。知り合いの夫が行方不明のままだとか、誰某が戦死したとかいう噂を耳にすることもあれば、まだあどけない表情を残す軍服姿の青年に、戦争の不条理を覚えることもある。愛読していた文学雑誌は休刊のままであり、美術館や劇場も閉ざされている。「忍耐」する都市の風景であった。藤村はこれを「留守居の都」⁽³⁶⁾と呼ぶ。徐々に街に活気が戻ってきたと感じられるようになったのは、6月に入ってからであった。「軍用の自動車や負傷兵」を見かけはするが、「どこに戦争があるかと思われるようになってきました」⁽³⁷⁾と記している。朝河がパリの石畳を踏んだのは、それから2ヵ月後のことであった。

朝河のパリ滞在日記抄訳

朝河の日記に、旅の目的である人々の暮らしぶりへの言及は殆ど無いが、3週間の足取りは、はっきりしている。ここでは、パリに到着してから出発するまでの朝河が歩いた跡を、日を追って見ていきたい。

8月13日、金曜日の朝、パリに着く。最初の宿泊先は、オテル・ド・マルタ（1泊11フラン）で、国立図書館の向かいにある。便利だがダイアナの滞在先オテル・ド・イエナ（1泊12フラン）に比べると値段に見合わない。翌日にはオテル・ド・イエナに移ることにする。

14日、ホテルの移動が終わると、ルーヴル美術館へ向かう。但し閉館。それで、ノートルダム寺院を見物することにする。食事はダイアナとパレ・ロワイヤルのレストランでとる。

15日、リュクサンブール美術館及びクリュニュー美術館に行ってみるが、どちらも閉館。近くのサン・ジェルマン・デプレ教会とサン・シュルピス教会を見学する。夕方は、プーローニュの森をダイアナとドライブし、夕食を共にする。帰り道、上空に飛行機を見る。

16日、シャン・ド・マルス、バスティーユ、リパブリック広場、学士院、コンコード広場を見物。

17日、再びリュクサンブール美術館に行くが、やはり閉館。パンテオンも閉館。円形競技場、ソルボンヌ大学、そして大学付近の小さな教会を見て歩く。

18日、ホテル・アストリアに設置された日本赤十字病院をダイアナらと訪問。その後ホテル・マジェスティックでお茶にする。夜はエッフェル塔を見ながら散歩するが、トロカデロ公園に灯りはなかった。

19日、ギメ美術館に出かける。そして、夜はヴァロンブローザ伯爵のピアノ演奏を聞く。

20日の午後、やっとリュクサンブール美術館で、近代絵画及び彫刻を鑑賞することが出来た。しかし、展示内容には失望した。また、アンヴァリ

ッドでナポレオンの墓を見る。この日に『エコー』(*L'Écho de Paris*)の記者ユージン・タルデュー (Eugene Tardieu) からインタビューを受ける。

21日、ダイアナと一緒にベルサイユに行く。

22日、地下鉄を使い、聖ニコラス、聖マルタン、聖ドニ、聖ローラン、聖バンサン・ド・ポールの聖堂を見てまわる。東駅では目を泣き腫らした女性を見かける。午後は、ダイアナと一緒に馬車でトロカデロまで行き、彫刻を見る。そして再びノートルダム寺院へ。夕方、ゲーテ劇場で、コメディー、*L'Enfant du Miracle*を観る。

23日、バック通りに診療所を開業していたロイソン夫人 (Madame Loyson) を訪ねる。

24日、20日のインタビューが新聞に掲載される。国立図書館に行く。

25日、日本大使館に行く。杉村氏から国立図書館利用のための推薦状をもらうためである。

26日、国立図書館。ティータイムはヴァンドーム広場でダイアナと一緒に過ごす。

27日、午前中図書館。ボートでセヌを下る。

28日、朝から午後4時まで図書館。Vaudevilleで戦争劇を観る。

29日、Sarah Benhardt劇場で*La Vierge de Lutece*を観る。主役はBlanche Dufrene。

30日、聖クラウドに行く。

31日、ヴァンセンヌの森に行く。行きはボートで帰りは地下鉄。ダイアナと一緒に日本赤十字社による石井男爵を迎えての晩餐会に出る。夜プチ・パレで映画を観る。

9月1日、イギリス領事館、及び警視庁に行く。最後にもう一度ノートルダム寺院を見る。

9月2日、パリを発ってロンドンへ向かう。

90年程前の日本人のパリ行程であるが、今日の旅人も訪ねる名所旧跡が並ぶ。朝河が最初に訪れたのはルーヴル美術館であり、次に向かったのは

ノートルダム寺院であった。バレ・ロワイヤルで食事をし、ブーローニュの森をドライブしている。また、演劇を見、映画鑑賞をしている。日記に記録された美術館、教会、劇場の名称は、その片仮名表記の文字だけでもパリの雰囲気を感じ出す。朝河の旅の目的は、戦時中の人々の暮らしぶりの観察であったが、書き留めた言葉に、緊張した街のムードが自ずと表われる。まずは頻繁に登場する「閉館」という文字である。次に、「上空に飛行機を見る」(15日)、「ホテル・アストリアに設置された日本赤十字病院」(18日)、「東駅では目を泣き腫らした女性を見かける」(22日)といった記述がある。最小限の記録ではあるが、藤村の写実的描写で伝えられた戦時下のパリの情景を加えれば、朝河の歩いたパリが、より鮮明に甦ってくる。

戦時下の観光地

藤村の『フランスだより』は前半部を「平和のパリ」、後半部を「戦争とパリ」とし、手紙の形式をとった現地報告書である。タイトルが示す通り、前半は戦前のパリの様子を、後半は戦時下のパリの様子を伝えたものである。1915年7月28日付けの、子供のいる情景の描写が最後の便りとなっている。つまり、厳密に言えば、朝河のパリ滞在期間は含まれていない。しかし、自然主義文学の先導者であった藤村の筆は、緊迫した戦火の中のパリから、まだその跡の煙りが残るとはいえ、徐々に日常をとりもどしつつある状態を、緻密に描いている。朝河の見た戦時下は、その最後の部分と重なる。

5月30日、藤村は、「パリに見るべきものの少ない時は今です。あらゆるミュージーを始め、パンテオンの戸も閉ざされ、番人は去り、いっさいの美術庫にかたく錠のおろしてある……」⁽³⁸⁾と記しているが、朝河の日記もその記述だけを見れば、ルーヴル美術館やクリュニユー美術館に展示された美術品や工芸品を見ることなく、パリを離れざるを得なかったと窺える。リュクサンブール美術館も、1度目2度目は閉館。3度目にしつと入館できたのであった。しかも展示内容には不満が残った。藤村の記述にもあ

るが、国家財産と考えられていた芸術品、つまり朝河が期待していた作品は美術庫に保管されていたのであろう。

朝河訪問の2ヵ月程前ではあるが、リュクサンブール美術館の一部ではフランスとベルギーの文化交流としてベルギー派の特別展が開催中であった。ピサロー、セザンヌ、マネ、モネ、ルノワール、ドガといった画家の作品は取り外されている、と藤村の報告にある。また、藤村は、ロダンの彫刻が目立って多かったと伝えるが、朝河はロダンに関心を示さなかったのか、または朝河が訪問した時には、展示物が変わっていたのか、その日記に、浮世絵に心酔していた世紀の彫刻家の名前は記述されていない。中世やルネッサンス芸術に関心を寄せる朝河にとってはそれらが見られないことの失望感の方が大きかったのかもしれない。

藤村は、朝河の訪問したアンヴァリッドのナポレオンの墓についても言及し、「ナポレオンの墳墓の境内に今度の戦争の分捕り品を見(る)」⁽³⁹⁾と記している。朝河の日記には訪ねたという事実以外何の説明も付け加えられていないが、藤村の描写により、平時とは異なる観光だったであろうことが窺える。

舞台芸術や映画に関しても同様である。朝河は3週間の滞在中、演劇を3作品観た。22日(日)は、Gaiet 劇場⁽⁴⁰⁾で、*L'Enfant du Miracle*というコメディーを、28日(土)はVaudeville⁽⁴¹⁾で戦争劇を、29日(日)はSarah Bernhardt 劇場⁽⁴²⁾で *La Vierge de Lutece* を観ている。藤村の劇場の描写は、6月11日の便りに詳しい。これは、「マチネーというマチネーはほとんど戦争ものです」⁽⁴³⁾と始まっている。戦争をもじった内容も、同盟国の国旗という小道具も、主人公をイギリス人に変えるという演出も、劇場入口の巡査も、戦時下の劇場の現実を伝える事実なのである⁽⁴⁴⁾。映画に関しては、朝河は、そのタイトルは記述してはいないが、プチ・パレでの鑑賞である。プチ・パレは1900年のパリ万国博覧会のために建設された展示場であり、その後パリ市立美術館として様々な催しが開かれた。しかし、ここも第1次大戦時は、藤村によると「フランス寺院その他戦禍をこうむった場所から移された古い装飾美術品のなごりを偲ぶというにすぎません」という状

況であった⁽⁴⁵⁾。

日本赤十字病院

朝河の日記にも藤村の便りにも、日本赤十字病院への訪問についての描写がある。日本赤十字社が第1次大戦で最初に海外に看護婦を送ったのは、日本が参戦した直後であった。1914年9月に入ってから、救護船2艘が、4組の救護班（看護婦組織）を乗せ、青島へ向けて出航した。派遣はアジアにとどまらず、欧州へと広がる。ロシアへは、医員、調剤員、看護婦、事務員、通訳からなる20名の救護班が10月26日に東京を発ち、11月19日にペトログラードに入り、貴族倶楽部に救護病院を開設した。フランスへの派遣はこれより3週間程遅れて東京を出発し1915年2月5日にパリに入っている。こちらも医者や調剤員、看護婦、通訳等専門家から成る総数31名の団体で、ホテル・アストリアがその拠点となった。場所は英国赤十字社から引き継いだもので、同年2月14日から翌年の7月まで、負傷兵の救護にあたった。約1年半の期間で実数910名、延べ数5万4,832名を治療した⁽⁴⁶⁾。

藤村は日本赤十字社の存在感を、次のように報告する。まず、「エトワールの凱旋門に接したプレスプールの町、アストリアのホテル、その石造の大建築物の屋上に高く旭日旗が翻って行来の人目をひきつつあるのは、フランスに派遣されたわが赤十字救護班の働いている場所です」⁽⁴⁷⁾という一文が、書き出しである。藤村は、ここに外科医の塩田班長を訪ねるわけだが、塩田の説明によれば、パリにあるどの赤十字病院（イギリス、アメリカ、ロシア）よりも設備が整っているとのことである。建物とベッドと食料以外は、手術台に至るまで日本から運んだそうである。負傷兵は、日本製の白い寝間着を着せられ、日本人の看護婦に手当てされ、フランス人の男爵夫人や伯爵令嬢たちに介抱してもらっている。藤村はこれを「東洋と西洋と、実用主義とエキゾチシズム（の混在）」⁽⁴⁸⁾と表す。また、負傷兵の収容場所がフランス貴婦人の社交の場となっているという現実を見せつけられ、貴族趣味的ボランティアズムに自己満足的要素を見抜く。しかし、

同時に、進歩した日本の姿がフランスで確認できたことへの喜びを表わす。この回の報告は皮肉を込めて「篤志看護婦」と題されてはいるが、先の引用文に見られるように「旭日旗」のはためく風景で始め、帰途につく電車の窓から見える「フランスの三色旗と赤十字旗」を描きつつ終えているところに、自負と望郷の思いとが読み取れるのである。

さて朝河であるが、藤村の言う「篤志看護婦」のグループと共に病院を訪問している。ダイアナ及びその友人のヴァロンブローザ伯爵婦人が一緒であった。日本赤十字社の角氏に案内され、その後4人でボワ・ド・ブローニュ通りを歩き、高級サロンのあるホテル・マジェスティックに入っている。

朝河の人脈

朝河がパリで会う人々は、ダイアナは勿論のことダートマス大学及びイエール大学、そして早稲田大学の人脈を通してであった。日本赤十字病院視察の翌日、ヴァロンブローザ伯爵及びダイアナとモンテベッロ公爵邸に招かれている。伯爵のピアノ演奏を聞き、晚餐の席につく。朝河は公爵の母親の知性に敬意を表しつつ、「病院で働いている」公爵令嬢の話に耳を傾ける。藤村の言うところの「篤志看護婦」であろうか。

さて、この招待には伏線が見える。朝河はパリ滞在の2日目にダイアナに長文の手紙を書いているが、その内容は日伊貿易に関してのアドバイスである。モンテベッロ公爵がダイアナを通して依頼してきたものに対する返答だ。ドイツと国交が途絶えたイタリアが、ドイツに頼っていた物品を日本に求める可能性を示唆したものだと考えられるが、その内容は戦時中に発展する貿易、或は商売が始まる一場面の記録になっているので、ここに紹介したい。朝河は疑問点を整理しながら次のように記す。(1)ドイツからの物品が入らなくなったので、それを日本に求めたいということだとしたら、その中身は何であり、どのくらいの規模の取引になるのか。(2)この貿易は長期にわたるものか。それとも一時的なものか。(3)もしも急を要するのであれば、取引や納品について具体的に示す必要がある。(4)

公爵が代表となるのであれば、ご自身のこれまでのキャリアやイタリアでの地位、取引先や取引銀行に関しての情報を提供する必要がある、と具体的に進めて行く上で不可欠な情報提供の必要性を助言している。

ダートマス関係では、タッカー学長⁽⁴⁹⁾ (William Jewett Tucker, 1839-1926) から、学生時代のルームメイトであったエドワード・タック (Edward Tuck, 1842-1938) を紹介された。タック氏は銀行家として成功した慈善家で、長年パリに在住していた。ダートマス大学の The Amos Tuck School of Administration and Finance に冠された “Amos Tuck” は父親の名前であるが、エドワード・タック氏の寄付により 1900 年に創設されたビジネススクールである。またエドワードの妻ジュリアも社会事業家として知られており、第 1 次世界大戦時は、夫婦共々フランスにおいて、難民救済場や軍人病院で支援活動に従事した⁽⁵⁰⁾。朝河は、シャンゼリゼ通りに住むタック氏を訪ね、エミール・ゾラの *J'accuse* の英語版を手渡されている。

大使館では、杉村陽之助及び石井菊次郎男爵 (1866 - 1945) と面会する。朝河は男爵の気さくな一面に触れ、日記にそれを記すと共に、日米交換教授について、及び中国の門戸開放について意見を述べたと書き留める。この 2 点は、当時朝河が大きな関心を示していた日本の外交問題である。前者はカーネギー国際平和基金により始められ日本側の代表は渋沢栄一 (1840 - 1931) が務めた。第 1 回の交換教授は日本側からは新渡戸稲造 (1862 - 1933) が選ばれ、アメリカからはハミルトン・メビー (Hamilton Mabie) が選ばれた。学術交流によって日米の相互理解が可能となると主張する朝河は、本事業が単なる社交的活動で終わることを案じ、批判的な見解を發表している⁽⁵¹⁾。後者に関しては、前述した大隈への提言、つまり、世界の常識を尊重した日中関係について語ったと思われる。朝河にとっては、単なる表敬訪問ではなく、帰国後は第 2 次大隈内閣で外務大臣となることが決まっていた男爵に、専門家としての見解を述べる機会となった。

また、朝河は著名な女優メリー・アンダーソン (Mary Anderson, 1859-1940) の夫であるナバッコ (Antonio Fernando de Navarro) と度々一緒に食事をしている。同じホテルに滞在していたのも縁であるが、ナバッコは 9 月の初

めにはロンドンに向かうという朝河を、ウォーセスターシャーにあった別荘に招待する程に、東洋の紳士に興味を持った。

日記からは朝河の洗練された社交性が窺えるが、時に不可解な問題に巻込まれることもあった。パリ滞在中に悩まれたのは、ミラノ・パリ間の夜行列車の中で知り合ったキアッポニ・アンジェロ（Chiapponi Angelo）というイタリア人の老弁護士であった。

列車がパリに到着すると、乗客はそれぞれの目的地へと散っていくわけだが、キアッポニは朝河に付き添ってくれた。ホテルへの案内人も彼である。面倒見の良い紳士で、朝河は彼と何度か一緒に食事をし、ダイアナにも紹介した。しかし、キアッポニの目的は別のところにあった。彼は、朝河に関する記事を新聞か雑誌に売り込もうとしていた。朝河の論文の翻訳まで試みていた。朝河は、食事をしながら受ける質問に違和感を覚えることなく、快く応じていた。しかし、突然、不可解な手紙が届けられるのである。キアッポニは、何と、謝礼を要求してきた。朝河は怒りを覚えながら、次のような手紙を書く。「拙論を翻訳するのにいか程かの出費があったことに関して誠に気の毒に思います。しかし、私には知名度をあげることへの欲求は露程も無いのです。取材の為に貴重な時間を割かせたとしたならば申し訳ない限りですが、ただ私は、貴殿の研究のために用いるのだらうと思っていたのです」と、丁寧な文面ではあるが、今後連絡の必要はない旨を示す一文が付け加えられている。

キアッポニとは違い、著名な記者からのインタビューの依頼もあった。これに関しては次の章で扱う。

Ⅲ．新たなアメリカ観

リュクサンブール美術館の展示物に失望した日、朝河は *L'Écho de Paris* 紙の記者ユージン・タルデュエの取材を受ける。*L'Écho de Paris* は1884年から1942年まで続いた日刊紙である。1914年のフランス新聞事情は、四大紙と呼ばれる *Le Petit Journal*、*Le Petit Parisien*、*Le Matin*、*Le Journal* が合わ

せて400万部数を発行し、*L'Écho de Paris*は12万強の発行部数で軍人階層に支持されていた。戦争が進む中、*Le Petit Journal*及び*Le Journal*は発行部数を減らしていったが、他3紙は増え続け、やや参謀本部の機関紙的存在になっていた*L'Écho de Paris*は、それを40万部に伸ばした⁽⁵²⁾。こうして本紙が加わり五大紙の時代が到来する⁽⁵³⁾が、朝河のインタビューが掲載されたのは、その発展期にあたる。

ユージン・タルデューは、文芸批評家であったが、歴史建造物の保護運動家としての側面もあわせもっていた。1907年には「バルサイユ友の会」(*La Société des Amis de Versailles*)を発足させている⁽⁵⁴⁾。尚、画家ポール・ゴーギャンから「私の作品は音楽である。線と色とでシンフォニー、或はハーモニーを生み出す」⁽⁵⁵⁾という言葉を引き出したインタビュアーは彼であった。

朝河のインタビュー記事は、8月24日の一面に掲載される。紙面の3分の1は戦争の風刺画⁽⁵⁶⁾が占め、「犠牲者節約のため、一層の努力をせよ！(Veillez aussi à économiser nos victims!)」をキャプションに、ドイツ軍を象徴する一角鉄兜を被ったまま重なるように横たわっている戦死者の中、脚の無い馬にまたがり上記のような命令を下すカイゼルの姿が描かれているが、その右側に朝河のインタビュー記事が掲載されている。「アメリカと戦争 (*L'Amérique et la Guerre*)」⁽⁵⁷⁾と題され、「日本人学者による」と副題が付いている。この資料は、朝河研究としては本稿に於いて初めて紹介されるものであるので、ここに全文を翻訳掲載したい。

*L'Écho de Paris*に掲載された朝河へのインタビュー：

「アメリカと戦争」全訳⁽⁵⁸⁾

アメリカ合衆国の名門イエール大学教授、K. Asa Kova [ママ]氏が数日前よりパリに滞在中である。極東の文明史を専門とし、将来を担うアメリカの若者の教育に携わって20年になる。日本関係の著書では高い評価を得、ヨーロッパの知識人とも幅広いつきあいがある。

氏は、歴史家として、また研究者として、今日の戦争の原因に深い関心

を持つ。現紛争地帯のヨーロッパからは、はるかに離れた国の出身であり、アメリカ合衆国に異邦人として暮らし、アメリカ人及びその気質に関して鋭い洞察力を持つ。筆者は昨日、氏と面会する幸運を得た。

朝河：ヨーロッパは初めてです。国民の長所と短所が最も強く出るのが戦争です。他に比肩できるものではありません。イタリアを見て来ました。フランスには数週間滞在する予定です。その後イギリスに向かいます。イタリアでは非常に多くの収穫を得ました。

タルデュー：アメリカ事情に通じている方としてお伺いしますが、アメリカ人がドイツ人及び連合国に関してどのように思っているか、公平な目で見た印象をお聞かせ下さい。

朝河：実際、非常に驚きました。話すことは沢山あります。ルシタニア号が潜水艦に撃沈されるや、アメリカ人は一丸となりました。それまでアメリカ人は、どこか一つの国に味方するという態度は示していませんでした。ドイツ軍によるベルギー侵攻が報道された時は驚きを隠し得ませんでした。多くの人々はその残虐行為を信じようとしませんでした。その報道は公正を欠いているとか、大袈裟だと思える人もいました。アメリカ人は、国家間条約の履行、そしてその遵守は、人命と同様何よりも大切だと考えます。これは絶対的なことであり、アメリカ文明の中で背くことのできない原理原則なのです。卑怯にもルシタニア号の乗客の命を奪ったドイツ軍潜水艦の行為に、アメリカの世論は本当に動揺しました。その日以来、アメリカ全体がドイツ軍の行動を糾弾するようになり、人々は正義感に目覚めたのです。今のアメリカにはドイツに対する同情は露程もありません。ドイツは人道的な規律の謀反者と見られています。つまり連合国の受け止め方と同じです。

タルデュー：合衆国には、参戦を支持する意見もあるとお考えになりますか。

朝河：いいえ、アメリカ人が連合国に対し、直接的な軍事援助をすること

はないと思います。財政的な援助や、その他必要とされるものに関してはいつでも与えられる準備ができていますと思いますが。ウィルソン大統領の態度に、アメリカ全体がこの状況をどのように見ているかが表われています。大統領がドイツに対して意思表示（参戦の否定）をした時、国民は彼と共にありました。

タルデュー：ドイツ系アメリカ人はいかがでしょうか。

朝河：こちら、ドイツ支持は全く見られません。というのは、大多数のドイツ系アメリカ人は出身国の政府の行動を不当だとみなしていますから。それに忠誠心はアメリカ市民として持っているわけです。ドイツのプロパガンダに心酔する者もいますが、ルシタニア号事件で喪失感がもたらされて以来、何の影響力も及ぼさなくなりました。もう誰も耳を傾けませんし、信じません。

最後に Asa Kova 氏は次のように締めくくった。

朝河：かいつまんで言えば、大西洋横断大型定期船が悲劇的な運命に遭遇するまで、アメリカは連合国寄りの態度を示すことを躊躇していたのです。中立の立場をとっていたからです。しかし、実際に衝撃を受けたあの日以来、アメリカは反ドイツの立場を表明しています。時間が経っても、反独感情は高まる一方です。つまりこの事件は、ヨーロッパ戦争に於いての米欧関係を見る時、大きな意味をもつことになります。

E. T.

本インタビュー記事の副題には「日本人学者による」と朝河の国籍が明示されてはいるが、タルデューは、日本人としての朝河に関心を持ったわけではない。アメリカの高等教育機関で「異邦人」として教鞭を執る学者朝河に意見を求めたのである。記事の中に「日本」という文字が登場するのは一度だけで、「日本関係の著書では高い評価を得」と朝河の専門分野

に言及してあるにすぎない。

朝河自身にとってこのインタビューは、滞米20年で新たに自覚するところとなったアメリカ観を語る機会になった。先述したタッカー夫人への手紙にも見られる通り、ルシタニア号撃沈事件以来、朝河は、アメリカ人の他者を思いやる心と市民同士の一体感を強く意識するようになっていたわけだが、本インタビューでもそれが、「正義感」という言葉で表明されている。

朝河は戦時下のヨーロッパの人々の暮らしぶりを観察するために、この旅行を計画したわけであるが、第三国に来て、再び新たなアメリカ観を持つに至った。朝河自身、予期していなかった新たな収穫であるが、これより2日後に書いた坪内逍遙への手紙にも詳しく述べられている。

坪内逍遙へ宛てた「アメリカ観」

朝河は1895年12月に渡米しているので、ヨーロッパ旅行は滞米20年目の年にあたる。朝河にとってアメリカは人生の半分近くを過ごした国であり、新聞記事や講演でアメリカを論じてきた。しかし、このヨーロッパ旅行において、自身に新たなアメリカ観が芽生えたことに気付くのである。朝河は坪内に対し、アメリカが世界に誤解されてきた点を指摘する。ドイツやイギリスがアメリカを論じる時に、本質を捉えきれていないことを一因とし、日本のアメリカ観もドイツやイギリスからの情報に頼っていたので同様に偏った見方をせざるを得なかったと分析する。つまり、朝河は、日本人の論じるアメリカ観が一面的であるとの見解を坪内に示すのである。ただ、新聞報道も不十分であるが、長年生活している者でも難解と思うのだから仕方が無いのかもしれない、と国民性を見極める困難さは認めた上での意見である。

朝河は、ヨーロッパ、イギリス、日本に欠け、アメリカに在るものとして、(1)豊かな資源、(2)法律も社会も民主的であり国家の基礎は個人にあるという考え方からくる自信、(3)多民族国家であるがゆえに将来も多様であることに変わりはないという特色をもつ、の3点をあげる。そして、

これに根づく国民感覚として、「人の生命を故意に取ることに関する Sense of horror (恐怖感)」⁽⁵⁹⁾ がどの国にも勝って発達したと指摘する。朝河はアメリカが今回の戦争に於いて中立国の立場をとる理由を、「数百万の生命を賭けて戦ふに至るを米人が中心から憎む」⁽⁶⁰⁾ からであると説明する。朝河は、旅発つ直前に起こったルシタニア号撃沈事件で気付かされたアメリカ人の連帯感が、「正義」と「公平」の感覚に起因するものである、とヨーロッパ旅行において確信した。戦争という突発的な事件により、ヨーロッパの社会や人々はどのような影響をもたらされるのかを観察する目的で始まった旅ではあったが、アメリカ再考の旅にもなったのである。

「多分、パリを離れたらパリについて書けるのかもしれない。ミシガンを離れてミシガンについて書けるように」⁽⁶¹⁾。これは朝河よりも5、6年遅れてパリを体験したヘミングウェイの言葉であるが、朝河も、アメリカを離れて、アメリカがより鮮明に見えてきたということだ。この手紙は、パリ滞在が終わりに差ししかかった頃、書いたものである。逍遙は、これを『早稲田学報』⁽⁶²⁾に掲載する。欧州視察旅行の報告という体裁をとってはいても、本文の凡そ3分の1が、新たに気付いたアメリカ観で占められているのが興味深い。

おわりに

本研究を通して、朝河が第1次世界大戦の時代とどのように向き合っていたか、ある程度見えてきた。日本の対中国政策への朝河による批判に関しては、これまでも指摘されてきたが、資料を読み直してみると、朝河が、特に「世論」を重視していた点が明瞭になってきた。また、朝河がヨーロッパ戦に言及する際には、「正義」の概念がその議論の中心を成していたことが友人への手紙から確認できた。

国際紛争を論じる時、朝河の視点は、国家間の利害関係というよりも、国家の行為そのものが道徳的に正しいか否かに置かれる。朝河は、国家や政府といった体系よりも、それを成す個人に注目し、市民としての感覚を

鑑みることを重要視した。生命を脅かされることを覚悟しながら戦時下のヨーロッパに赴いた理由も、こういった面から説明できる。一国を理解する為には現地に於いて人々を観察することが不可欠だったのである。

本稿はパリ滞在の3週間に焦点を当てたが、時代の雰囲気を加味するのには、藤村の詳細なパリ描写を用いた。これを、淡々と記された朝河の日記と併せ読むことにより、これまで言及されたことのない朝河のパリ滞在の様子をより具体的に提示できたと思う。

朝河の視線は、市井の人に向かった。日記には、ダイアナの友人の名前に加え、「ホテルの受け付け係り」、「カフェの給仕」、「タクシーの運転手」、「理容師」、「本屋の店員」、「劇場の案内人」、「国立図書館の司書」といった文字が読み取れる。朝河が接したフランス人である。彼らとの交流の様子は詳細に記述されているわけではないが、書き留められたこれらの活字から、旅人としての触れあい、及び市民の日常の風景が浮かび上がってくる。

多くの同時代人と同様、朝河にとってもパリは憧れの都であった⁽⁶³⁾。藤村に比べると批判的な記述が少ない。例えば、日本赤十字病院を訪問した後で藤村が皮肉った貴族趣味的ボランティアリズムも、朝河の目を通せば、敬意を捧げる対象になる。朝河は、「如何なる階級も皆一様に愉快地に、深き自信を持って戦争の義務を負担し居候は見るだに涙を催し候」⁽⁶⁴⁾と、むしろ高く評価している程である。批判の筆を研ぐのに3週間という期間は短すぎたのかもしれないが、客観的な観察者として留まることはできなかったのであろうか、戦時下に身を置くフランス人に対する深い同情心が行間に取り込まれる。

先に述べたように、朝河の欧州旅行は、この後、イギリスへと向かう。本研究では、朝河も用いたサンプリングという制度史研究の方法に倣い⁽⁶⁵⁾、1915年8月のパリという時と場所を限定して考察してきたわけだが、次はロンドン滞在時に焦点を当てて調査研究を試みるつもりである。

(注)

(1) 阿部善雄『最後の「日本人」——朝河貫一の生涯』、岩波書店、1983年。本稿では2004

- 年出版の岩波現代文庫版を使用。
- (2) 岩波現代文庫版で井出孫六は、朝河貫一が日本封建制度の研究を始めたのは「武士道」の本質を極めるためだったのではと推論し、「最後の日本人」というタイトルをつけた阿部善雄の朝河解釈もそこにあるのではと解説する。
 - (3) 朝河が1905年1月1日に書いた「年頭の自戒」に言及されている。朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』、早稲田大学出版部、1991年、751ページ。
 - (4) 前掲、阿部、207-259に詳しい。
 - (5) Yale University Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives, Group Number 40 Kan'ichi Asakawa Papers, Series No. II, Box 5, Folder Nos. 45-53に、本稿で用いる朝河の自筆日記（1900 - 1925）が所蔵されている。朝河の欧州旅行の期間はFolder 49にある。また本旅行で頻繁に登場する人物ダイアナ・ワッツ（Diana Watts）に関しては、次の論文で詳しく取り上げる。
 - (6) 前掲、阿部、84ページ。
 - (7) 朝河貫一研究会、第57回研究会（2002年10月5日）にて「朝河の欧州旅行」を報告。
 - (8) Asakawa Kan'ichi Papers, 自筆日記、1915年8月20日に“Eugene Tardieu, of the 'Echo de Paris' comes for an interview”とある。
 - (9) 島崎藤村『戦争とパリ』『島崎藤村全集 13 フランスだより』、筑摩書房、1956年、107-261ページ。
 - (10) 朝河貫一『日本の禍機』、講談社、1987年再版。
 - (11) 朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集』、早稲田大学出版部、1991年。
 - (12) 中村尚美「朝河貫一のアジア政策批判」、朝河貫一研究会編『甦る朝河貫一』、国際文献印刷社、1998年、159-169ページ。
 - (13) Asakawa Kan'ichi Papers, 自筆日記、1914年8月18日。
 - (14) 1913年11月及び12月、大隈重信主宰『新日本』に、朝河貫一の現地報告「モホンク湖畔国際仲裁主義19年會の記」を掲載している。
 - (15) 大隈重信著『開國五十年史』の英語版 Marcus B. Huish 訳、*Fifty Years of New Japan* (1909) を書評している。
 - (16) 『朝河貫一書簡集』書簡68、210ページ。
 - (17) 同上。
 - (18) Asakawa Kan'ichi Papers, 自筆日記、1914年8月27日。
 - (19) 坪内士行と朝河との関係に関しては、拙稿「朝河貫一の日記に表われた国際化時代の日本 1917 - 1919」で言及している。『敬愛大学国際研究』第17号、2006年。
 - (20) 『朝河貫一書簡集』書簡75、235-240ページ。
 - (21) 増井由紀美「朝河貫一の講義」、前掲『甦る朝河貫一』、18ページ。
 - (22) Asakawa Kan'ichi Papers, 自筆日記、1915年5月18日。
 - (23) 同上。
 - (24) Wanamaker'sの創業者はJohn Wanamaker (1838 - 1922)。第1号店はペンシルヴァニア州フィラデルフィアに建てられた。朝河が買い物したニューヨーク店は1896年開店の2号店である（ブリタニカ国際大百科事典）。
 - (25) A.A.Van Tine & Co.は1869年、東洋からの輸入品を扱う店としてニューヨークにオープンした。創業主はAshley A. Vantine (1821 - 1890)。『ニューヨークタイムズ』紙の死亡記事によると「中国や日本へ商用で16回渡航した」とある。〈<http://homepages.rootsweb.ancestry.com/~cyocom/iashley2.htm>〉, 08.6.29.
 - (26) Asakawa Kan'ichi Papersの中には、朝河がフランス語及びドイツ語で書いた手紙などが含まれている。
 - (27) 朝河はこの舞台を観た後に、「ハムレット論」を書く。これに関しては拙稿「朝河貫

- 一：明治の『国際人』『津田塾大学紀要』第38号、301-325ページ、を参照されたい。
- (28) 瀬沼茂樹編『島崎藤村年譜』『島崎藤村全集別巻』、筑摩書房、1986年。藤村の経歴は左を参考にした。
- (29) 朝河の母校、安積中学（現安積高等学校）では、校庭に「朝河桜」と呼ばれる桜の木があり、朝河が英語の辞書を全頁食べて残った表紙を桜の木の下に埋めたという話が今もなお語り継がれている。
- (30) 明治時代のお雇い外国人。英語教師。
- (31) 朝河貫一書簡編集委員会編「朝河貫一著作目録」、前掲『朝河貫一書簡集』、43ページに、修養期の作品として、翻訳「記憶論」及び「ベニスの賊」があげられている。どちらも東京専門学校入学前だと思われる。
- (32) 1885年創刊。女性解放啓蒙の雑誌。藤村はここに「無名氏」や「n. n. (no name)」のペンネームで翻訳を寄稿している。柳田泉『『無名氏』時代の島崎藤村』、関良一「女学雑誌時代の藤村」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書島崎藤村』、有精堂、1971年、1-8、50-60ページ参照。
- (33) 1890年徳富蘇峰が創刊した日刊新聞。朝河貫一のダートマス大学時代のアメリカ便りを掲載する。増井由紀美「青年朝河のアメリカ便り」、朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』、早稲田大学出版部、1993年、29-39ページ。
- (34) 並木張『島崎藤村と小諸義塾』、株式会社樫、1996年、32-37ページ。
- (35) 藤村に関しては、前掲『島崎藤村全集13 フランスだより』に加え『島崎藤村全集17』、筑摩書房、1957年を参照。
- (36) 島崎「戦争とバリ」『島崎藤村全集13 フランスだより』、182ページ。
- (37) 同上、226ページ。
- (38) 同上、222ページ。
- (39) 同上。
- (40) Galet劇場。モンパルナスの劇場街にある小劇場。現存。
- (41) 現在はParamount Opéra映画館。
- (42) 現在はThéâtre de la Ville。
- (43) 島崎「戦争とバリ」、228ページ。
- (44) 同上。
- (45) 同上、222ページ。
- (46) 日本赤十字社編『日本赤十字社五十年小史』、内閣印刷局、1926年、46-48ページ。
- (47) 島崎「戦争とバリ」、202ページ。
- (48) 同上、213ページ。
- (49) タッカーは、朝河をダートマス大学に迎え入れた時の学長であり、朝河を精神面及び経済面で支え続けた。
- (50) 〈<http://www.tuck.dartmouth.edu/about/history/index.html>〉、08.6.29.
- (51) Kan'ichi Asakawa, "On the Japanese-American exchange professorsip," *Japanese-American Commercial Weekly*, Vol. 20: No. 1, Oct. 1914.
- (52) Pierre Albert, Fernand Terrou, *Histoire de la Presse*, Presses Universitaires de France, 1970, pp. 69-80.
- (53) René de Livois, *Histoire de la Presse Française: De 1881 à nos jours*, Vol. II, Les Temps de la Presse, 1965, p. 373
- (54) 〈http://www.amisdeversailles.com/societe_01.html〉、08.2.21.
- (55) Pierre Leprohon, *Paul Gauguin*, Grund, 1975, p. 246. TardieuがGauguinにしたインタビューの直接引用が一部転載されている。
- (56) 本紙には、作家であり政治家でもあった国家主義者 Maurice Barrès (1862 - 1923) が

イラストを描いていた。

- (57) Eugène Tardieu, "L'Amérique et la Guerre," *L'Écho de Paris*, 24.8.1915.
- (58) 読みやすさのために、インタビューの箇所は発言者名を文頭に加えた。
- (59) 『朝河貫一書簡集』、239 ページ。
- (60) 同上、240 ページ。
- (61) Ernest Hemingway, *A Moveable Feast*, Scribner, 1964, p. 7. 本稿に於いては2003年ペーパーバック版を使用。
- (62) 1915年11月刊行、249号に掲載される。
- (63) 坪内逍遙への手紙に「米国を出で候時の私の一大希望は此嘆美すべき仏国民と親しく接せんことに有之、現に仏京に参りて此希望を充たし且つ一層傾倒致候」とある。『朝河貫一書簡集』、238 ページ。
- (64) 同上。
- (65) 朝河の代表的論文に“The Early SHO and the Early Manor” (1929) があるが、日本の封建制度の発生を実証するために時代と場所を限定して分析している。増井由紀美「朝河貫一の関西調査旅行 1918年7月－1919年1月」『敬愛大学国際研究』第19号、2007年、108－113 ページ。